

論文審査の要旨
(Summary of Dissertation Evaluation)

博士の専攻分野の名称 (Major Field of Ph.D.)	博士 (教育学) Ph.D.	氏名 (Candidate Name)	安 藤 和 久
学位授与の要件	学位規則第4条第1項・2項該当		
論文題目 (Title of Dissertation) 学校改革としてのイエナ・プランに関する研究 —ペーターゼンの自律的教育科学の構想に着目して—			
論文審査担当者 (The Dissertation Committee)			
主 査 (Name of the Committee Chair)	准教授	吉 田 成 章	
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	教 授	丸 山 恭 司	
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	教 授	曾 余 田 浩 史	
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	教 授	七 木 田 敦	
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	教 授	山 内 規 嗣	
〔論文審査の要旨〕 (Summary of the Dissertation Evaluation)			
<p>本論文は、ドイツにおけるイエナ・プラン (Jena-Plan) がいかなる学校改革であったのかを、ペーターゼン (Peter Petersen) の自律的教育科学の構想という視点から明らかにしたものである。</p> <p>論文の構成は、次のとおりである。</p> <p>序章「本研究の目的と構成」では、本研究の目的および対象・方法が明示されるとともに、ペーターゼンが1924年からイエナ大学附属学校において取り組んだ学校改革、すなわちイエナ・プランを「学校改革 (Schulreform)」として捉える本論文の射程が示されている。先行研究の検討およびイエナ・プラン研究、ペーターゼン研究を踏まえた上で設定された本論文における研究の課題は、ペーターゼンの自律的教育科学の構想とイエナ・プランとの関係をいかに捉えることができるか、イエナ・プランがいかなる教授学上の独自性を有するのか、内的学校改革でもありかつ外的学校改革の試みでもあったイエナ・プランの学校改革過程をいかに描きうるか、そして改革教育学 (Reformpädagogik) における教育実践を「学校モデル」として捉える理解をいかに乗り越えることができるか、である。</p> <p>第一章「ペーターゼンの自律的教育科学の構想」では、「自由で一般的な民衆学校」としてのイエナ大学附属学校の実践に結びつくペーターゼンの教育科学の基礎理解が提示される。その上で、精神科学・文化科学として教育学を性格づける当時の主流となっていた潮流ではなく、自然科学と精神科学との間に現実科学を設ける科学区分に基づいて教育科学を構想したペーターゼンの認識が指摘される。さらにこの自律的な教育科学の構想は、教育学的事実 (pädagogische Tatsache) の記録と解釈からなる教育学的事実研究 (pädagogische Tatsachenforschung) を介して、学術的な教師教育 (akademische Lehrerbildung) を担うものとしてペーターゼンの自律的教育科学が構想されたことが描き出されている。</p> <p>第二章「ペーターゼンによるイエナ・プランの授業指導論」では、ペーターゼンの授業指導論が次の三つの側面から特徴づけられている。すなわち、リヒトヴァルク学校における生活共同体学校としてのカリキュラム改革、ヘルバルト学派の授業論との批判的対峙、ペスタロッチーの「居間の教育」思想の継承、である。イエナ大学附属学校の実践展開と軌を一にして提起されたペーターゼンの授業指導論は、教育学的事実 (pädagogische Situation) を基底に、授業を前もって組織し準備する授業の指導 (Führung des Unterrichts) と授業における指導 (Führung des Unterrichts) という二つの指導からなっていることが、イエナ大学附属学校の三つの教育学的事実研究の記録とともに明らかにされている。</p> <p>第三章「1924-1950年のイエナ・プランによる学校改革過程」では、1924-1929年の創設期、1930-1944年の拡充/展開期、1945-1950年の閉鎖期という三つの時期区分を提起した上で、それぞれの時期におけるイエナ・プランの内的・外的学校改革が明らかにされている。基幹グループ (Stammgruppe)</p>			

やグループ作業 (Gruppenarbeit), 週作業案 (Wochenarbeitsplan) といったイエナ・プランの教授組織上の特徴が提起される過程, およびペーター・ペーターゼン・アーカイブ・フェヒタ (Peter Petersen Archiv Vedhta) で収集した史資料に基づいて, イエナ大学教育科学研究所で開催されていた教育学週間 (pädagogische Woche) によるイエナ・プランの取組を公開する取組が明らかにされ, 続いてイエナ大学附属学校外のイエナ・プランによる学校改革が検討されることで, 内的学校改革および外的学校改革としてのイエナ・プランの展開過程が明らかにされている。

第四章「イエナ・プランからの学校改革の問い直し」では, オランダを中心に日本においても展開されることになったオルタナティブな教育を志向する「イエナ・プラン」の動向を視野に, 1991年に州立の実験学校としてイエナに設立されたイエナプランシューレによるイエナ・プランの実践的特徴の継承の側面と, 改革教育学研究においてイエナ・プランを位置づける論点としてその教授技術に着目した継承可能性の側面とが検討され, イエナ・プランから描きうる学校改革の展望が次の三つの視点にまとめられている。すなわち, 教育学的事実から授業と学校を創る指導論を構想する授業・カリキュラムの視点, 学校改革そのものをとらえる見地がいかに求められるのかという教育学研究の視点, そして教育的自由のもとで教師自身が自らの教育観を形成しうる学術的な教師教育の視点, である。

終章「本研究の成果と課題」では, 本研究の成果として, イエナ・プランは教育学的事実に基づく「自由で一般的な民衆学校」としての学校改革であることを明らかにしたこと, イエナ・プランはペーターゼンの授業指導論に結実する教育の視点から学校を捉え直した学校改革であることを指摘したこと, イエナ・プランはイエナ大学附属学校という一つの学校の内的な学校改革であっただけではなく, イエナ大学附属学校外の学校にも波及する外的学校改革であったことを明らかにしたことが提起されている。その上で研究の課題として, ペーターゼンの自律的教育科学の構想をドイツ教育学史に位置づけること, および改革教育学の「改革」に込められた意味の検討から教育学そのもののあり方を提起することが挙げられている。

本論文は, 次の三点で高く評価できる。

1. イエナ・プランという用語で広く知られるイエナ大学附属学校の学校改革の展開過程を, 三つの時期区分を提起しながら東西ドイツ統一後の展開に至るまで重層的かつ多角的な視点から明らかにしていること。
2. イエナ・プランの学校改革の展開とペーターゼンの自律的教育科学の構想とを重ねることで, 教育学的事実研究に基づくイエナ大学附属学校における学校改革の内実と, その取組に基づく学術的な教師教育およびイエナ大学附属学校外にまで波及する内的・外的学校改革としてのイエナ・プランの展開を明らかにしたこと。
3. 教育改革や学校改革といった様々な用語で「改革」が語られる今日的状況において, 授業・カリキュラム・教師教育という視点から学校改革の過程を捉えることで, 翻ってその改革を支えている教育観および教育学研究の特質を描き出すことの重要性を提起したこと。

以上, 審査の結果, 本論文の著者は博士 (教育学) の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和5年2月8日

備考 要旨は, 1,500字以内とする。

(Note: The summary of the Dissertation should not exceed 500 words.)